

第4章 総括

第1節 都田川流域における弥生時代中期の諸問題

1 はじめに

西遠江における弥生時代中期については、集落構造を把握できる調査事例はこれまで殆ど確認できなかった。しかし、今回の発掘調査により井通遺跡は弥生時代中期の集落遺跡であることが確認され、当該期の資料を追加することができた。

弥生時代に限らず、集落の動態を窺うには建物・溝など個々の遺構を集合体として捉えるだけでなく、居住以外の生産域・墓域等を含めた有機的関連の中で位置付ける必要がある。

したがって、今回の調査成果は多様な集落構造の一側面にすぎないが、ここでは遺構・遺物にかかわる諸問題を取り上げ、資料の基礎的考察を行う。

2 遠江の弥生時代中期集落

西遠江の大陸系磨製石器 都田川・井伊谷川の微高地上に立地する井通遺跡においては、弥生時代中期後葉には人為的活動の痕跡が確認できる。また、都田川流域では中期に微高地上の各集落が出現・展開し、中川平野の開拓が本格化した段階と位置付けられる。

西遠江においては弥生時代中期をもって大陸系磨製石器は組成を完成させ、定着すると考えられている。帰属時期が確実に判明する資料は多くはないが、弥生時代中期の沖積地に立地する集落では大陸系磨製石器の組成が完成していることを追認できる。一方、台地上に立地する遺跡とは石器構成において著しい差異が認められるが、これをもって水田稲作の浸透や集落間格差を指摘することはできない。これらは開発型水田稲作を進行するために確立した石器構成であって、生業の類型差を表している可能性も推定できる。また、沖積地に立地する遺跡であっても、石器構成比の特徴を抽出し、大規模開発の可否・中核的集落の存否を検証するには現状の資料では充分ではない。

井通遺跡の大陸系磨製石器からは、

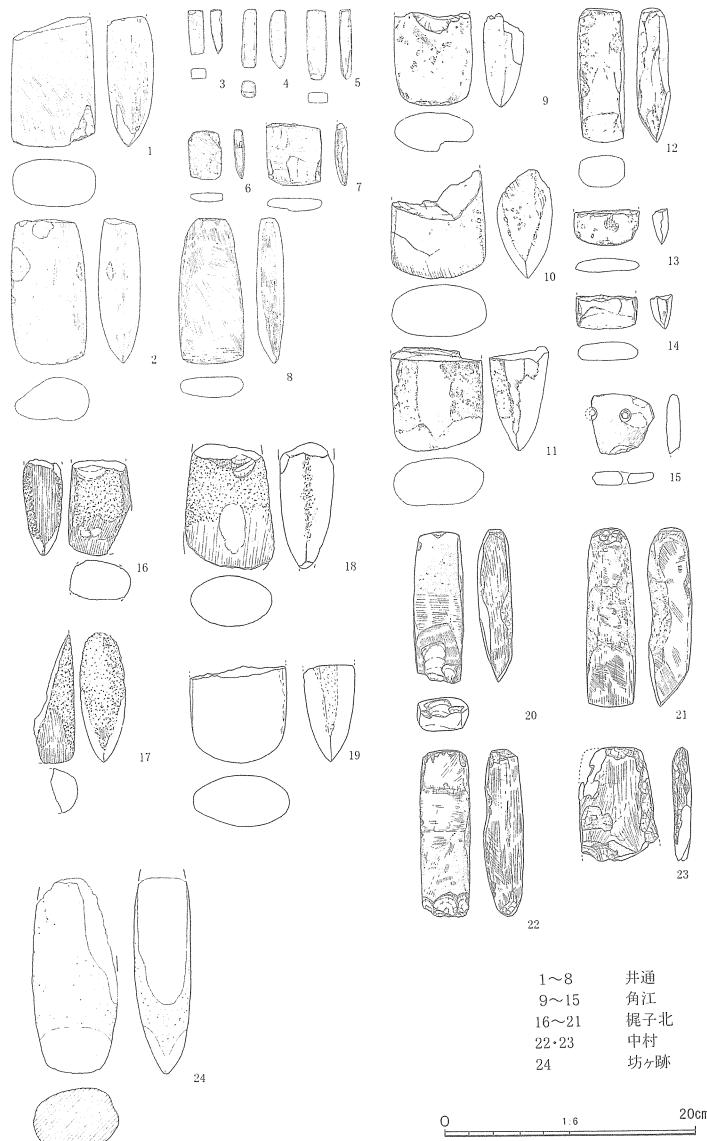


Fig.8 西遠江出土主要石器

開発型水田稲作を展開することが可能である石器組成であったと評価できる。しかし、都田川流域における石器組成の導入段階・集落の相対的位置付け・弥生時代後期への動態については今回の調査では明確に示すことはできなかった。

竪穴建物の形態 井通遺跡で検出された竪穴建物のうち平面形態が判明する建物は、建物長辺が比較的直線状・短辺はやや外に張り出すため隅部が丸味をもつ隅丸長方形を呈する。

竪穴建物の平面形態についてはすでに先学の優れた考察があり（松井1992、岩瀬2001、鈴木敏2001）、弥生時代中期後葉の遠江では隅丸長方形の竪穴建物は一般的に認められる建物形態であることが指摘されている。しかし、東遠江では長辺・短辺ともに丸味をもつ橢円形となり、形態差は天竜川が境界となると考えられている。

今回の井通遺跡の調査では、これらの指摘を追認する成果を得た。遠江における弥生時代中期の集落は、調査事例が少なく未だ検討する段階に到達していないが、西遠江の浜名湖を挟んだ北岸と南岸において竪穴建物の平面形態が共通であったことは少なくとも指摘できるであろう。

三河との関係 一方、中平遺跡では短辺も直線状となり、より長方形を指向する傾向が強い竪穴建物が検出されている。この形態は三河で検出される竪穴建物と類似しており、三河との関連を示すものと捉えられる。しかし、中平遺跡では隅丸長方形の竪穴建物もみられ、同じ丘陵上に立地する坊ヶ跡遺跡でも認められておらず、遠江ではこれまでのところ他に確認されていない。

三河と遠江の弥生時代中期中葉の竪穴建物は方形であったと指摘されており、中期中葉から後葉に到る平面形態の変遷においては同一であったと捉えることが可能であろう。しかし、井通遺跡が位置する都田川流域は地理的な位置から三河と相互に影響を及ぼしていたものと想定されるが、竪穴建物に関しては三河の平面形態を受容していない。したがって、三河と遠江は同一の建築様式に含まれるが、細分が可能な小様式を認めることができる。さらに、遠江でも東遠江は別の平面形態を認めることができることから、弥生時代中期後葉の竪穴建物には小さな地域性が表出する段階と位置付けられる。

後期への展開 平面形態が隅丸長方形の竪穴建物は、法ヶ崎遺跡で確認できるよう弥生時代後期前半までは受け継がれている。都田川流域でも台地上に立地する向山遺跡において、後期前半の隅丸長方形を呈する竪穴建物が検出されている。向山遺跡では後期後半に隅丸方形の竪穴建物に変化し、法ヶ崎遺跡では隅丸長方形と隅丸方形の建物が同時期に併存している。この動向は、伊勢湾沿岸地域の土器様式広域分布圏の成立と関連づけて理解されている（鈴木敏2001）。

弥生時代中期後葉から後期前半は生活様式の画期と評価でき、都田川流域における各集落にも影響が及んだものと推測される。今回の井通遺跡の調査では弥生時代中期後葉が中心であり、後期へと連続する集落の社会的動向を窺う考古資料を確認できなかったが、今後とも都田川流域における断片的な資料を精力的に紡ぎ合わせていく必要がある。

3 置石炉について

分布・形態・時期 井通遺跡に設置された炉には、置石炉となる竪穴建物が5軒検出されている。

遠江の弥生時代の炉形態は地床炉が中心であり、置石炉の形態をもつ竪穴建物は普遍的とはいえない。また、竪穴建物検出数の多寡を問わなければ、分布はこれまでのところ浜名湖北岸～天竜川流域沖積平野北部と、小笠山北西丘陵周辺の2地域に認められる（註1）。

これら置石炉の形態は、

A類－炉心に礫を置く形態

B類－炉縁に置く形態のうち、建物中央から短辺に向けて設置されたもの

C類－炉縁に置く形態のうち、建物中央から長辺に向けて設置されたもの

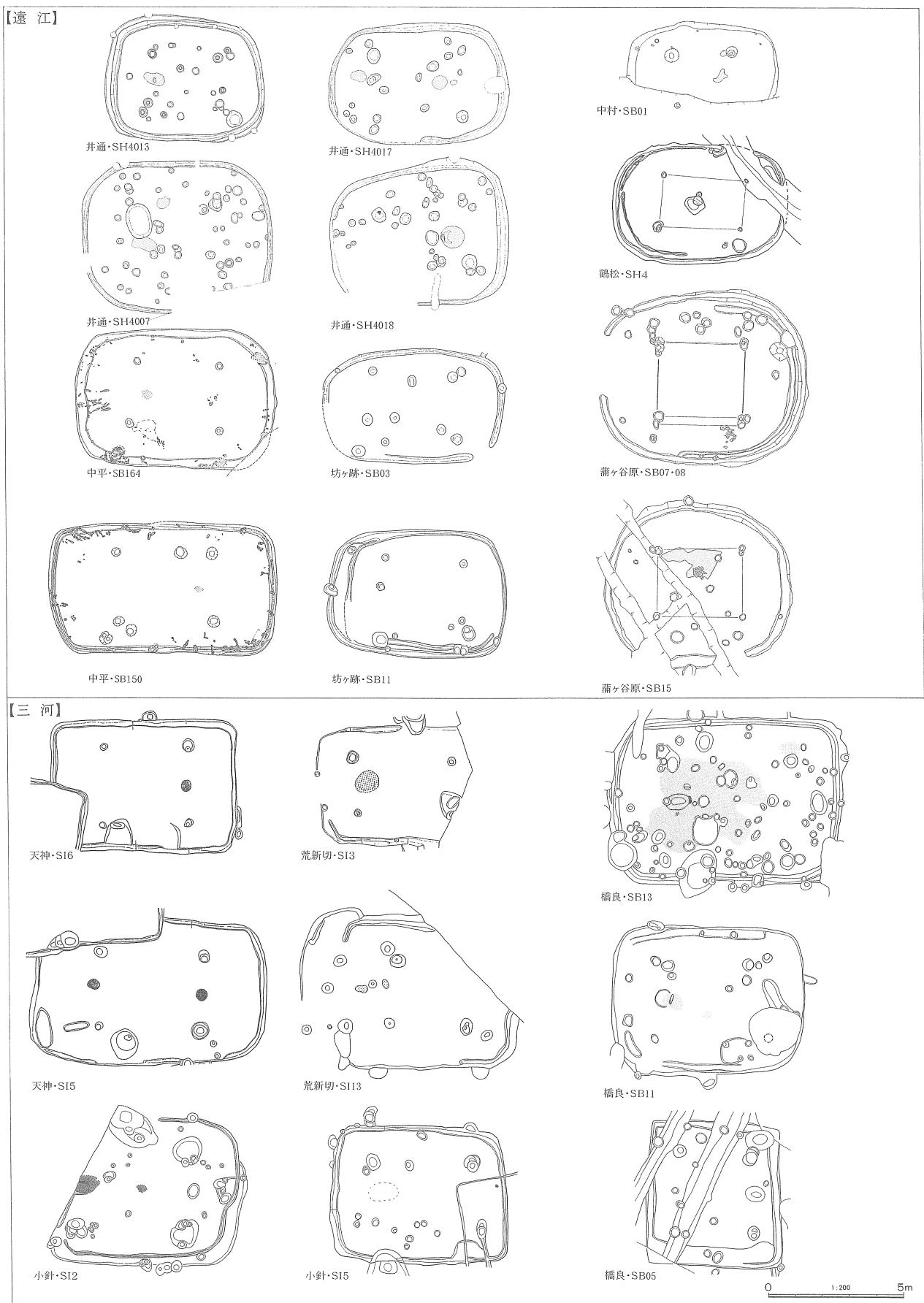


Fig.9 積穴建物集成

Tab.4 東三河・遠江置石炉一覧

遺跡名	遺構名	住居形態	置石方向	台付甕	台盤状土製品	時期
橋良遺跡	SB08	隅丸長方形	B	○		弥生中期後葉
	SB10	隅丸長方形	B			弥生中期後葉
	SB11	隅丸長方形	A	○		弥生中期後葉
	SB13	隅丸長方形	B	○		弥生中期後葉
井通遺跡	SH4005	隅丸長方形	B			弥生中期後葉
	SH4009	隅丸長方形	A	○		弥生中期後葉
	SH4013	隅丸長方形	A			弥生中期後葉
	SH4018	隅丸長方形	B		○	弥生中期後葉
	SH4019	隅丸長方形	B	○		弥生中期後葉
東原遺跡	SB101	隅丸方形？	A	○		弥生後期中葉
	SB111	隅丸方形	A	○		弥生後期後半
	SB118	楕円形	B?			弥生後期中葉～後半
	SB504	方形？	B?C?			弥生後期後半
	SB516	隅丸長方形	A	○		弥生後期
	SB519	方形？	B?C?			弥生後期後半
	SB533	楕円形	C			弥生後期
掛之上遺跡	SB1	方形？	A	○		弥生後期
愛野向山遺跡	SB22	？	？			弥生後期後半
	SB81	？	？	○		弥生後期後半
団子塚遺跡	SB16-4	隅丸長方形	C			弥生後期
	SB1	隅丸長方形	C			弥生後期
居村遺跡	SB4	隅丸方形	C			弥生後期前半

置石方向 - A : 中央、B : 炉縁・短辺、C : 炉縁・長辺

に分類可能である。

各類型の分布状況をみるとA類は各地域で認められるが、B類は浜名湖北岸～天竜川流域、C類は小笠山北西丘陵に中心をもつ形態であり、類型と分布に相関関係がみられる。

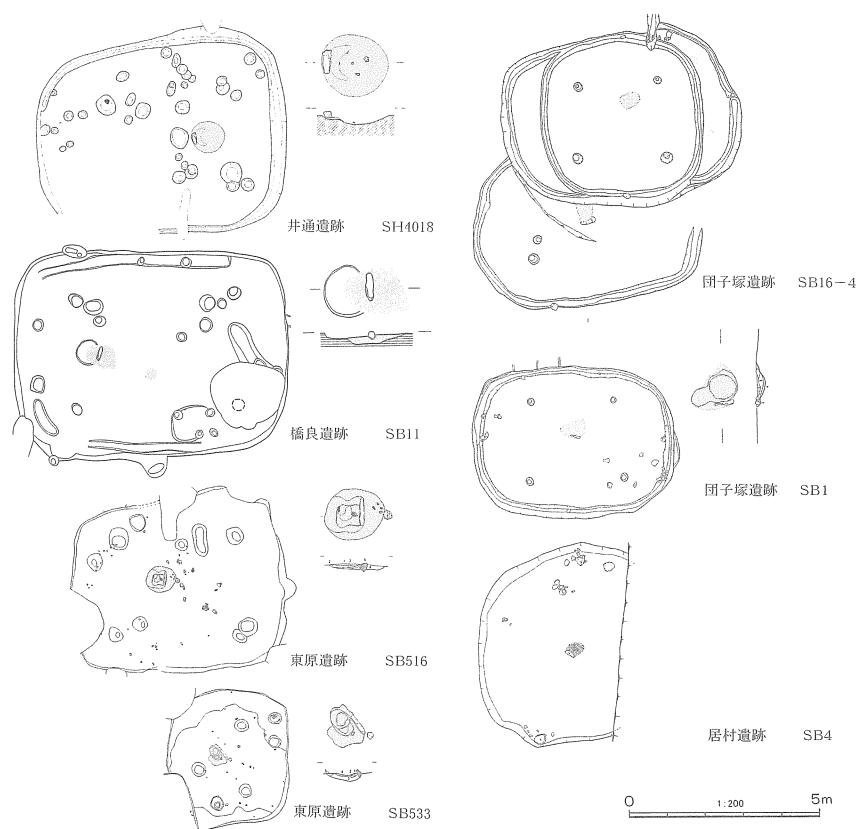


Fig.10 置石炉の諸例

置石炉はこれまでのところ弥生時代中期後葉には出現していたものと考えられる。西遠江では弥生時代後期～古墳時代前期の三方原台地上に立地する法ヶ崎遺跡・中平遺跡・坊ヶ跡遺跡などでは置石炉をもつ竪穴建物は確認されていない（註2）。一方、小笠山北西丘陵の各集落遺跡では、弥生時代後期にも置石炉がみられる。したがって、置石炉をもつ竪穴建物は天竜川付近を境界として、西側が弥生時代中期後葉頃・東側が後期頃に盛行したものと捉えられる。

置石炉の機能 弥生時代中期後葉～後期の置石炉だけでなく地床炉にも関連する遺物として、台盤状土製品と台付甕を取り上げてみる。台盤状土製品はそれ自体が甕を持ち上げて煮炊きを行う役割を担うものであるが（森1996・1998）、台盤状土製品と置石炉がともに確認されたのは井通遺跡における1例のみである。一方、甕を持ち上げて使用するための専用器種である台付甕は、弥生時代中期後葉には出現し、次第に普及していく。台付甕は置石炉をもつ多くの竪穴建物で認められており、置石炉における台付甕は一般的な使用形態であると考えられる。

甕の内容物に対する加熱方法には、平底甕ではオキ主体、台付甕は浅い地床炉において直火主体での加熱方法が熱効率の観点から最も適しているとされている（森1998）。つまり、弥生時代に到りオキを重視した加熱方法から炎主体の加熱方法へ煮沸方法が変化することが指摘されているように（小林1992）、台付甕の使用は強い直火による調理方法への転換を示している。その際、屋内で使用される炎から居住区間を確保する必要があるため、炉縁に礫を設置したことが置石炉に関わる成立要因の1つとみられる。建物中央から必ず外側に向けて礫を設置したのは、その傍証となるであろう。

置石炉の位置 井通遺跡において地床炉、若しくは床面上に焼土が複数確認できる竪穴建物は比較的多い。定量的分析を経ていないが、このような竪穴建物は他の遺跡でも相当数確認できるのではなかろうか。しかし、橋良遺跡例を除き、遠江の置石炉をもつ竪穴建物は炉・焼土が複数確認できるものはない。それは、竪穴建物内で炉の位置が固定されたことに他ならない。

置石炉に関しては、礫の部分が薪を浮かせて酸素供給を促進するためとする見解があるが（岩瀬1996・2001）、構造・系譜・片側煮炊きなどの諸点において検討の余地を残している。むしろ、一定方向から煮炊きが行われていたとする指摘がより重要である。つまり、強い炎であればこそ火処を固定して炎の侵入を防ぐ構造の炉形態であったと理解できよう。それは、竪穴建物内の空間分割を可能にしたものと評価できる。

置石炉と竪穴建物 置石炉をもつ竪穴建物は、東原遺跡を除けば隅丸長方形の竪穴建物において認められる。平面形態が隅丸長方形の竪穴建物は西遠江では弥生時代後期前半、東遠江では後期まで確認でき、遠江における置石炉の存続期間とほぼ合致している。したがって、炎主体の加熱方法により台付甕を使用する、平面形態が隅丸長方形の竪穴建物に置石炉が主に設置されたと捉えられる。

台付甕は弥生時代後期には普遍的な器種となり、直火による調理に比重を増したことが窺えるが、台付甕の使用と置石炉の必要性とは直結しない。隅丸長方形の竪穴建物に設置された置石炉は炎主体の加熱方法に対処する炉形態であったが、次第にそれらは減少していく。代わって隅丸方形の竪穴建物に地床炉を設置する居住形態が主体となる傾向を指摘できる。

4 結語

今回の井通遺跡の調査では、弥生時代中期後葉に集落が形成されたことが確認され、中川平野における本格的な農耕社会の様相を窺える資料を得た。弥生時代後期の都田川流域は、岡の平遺跡・椿野遺跡などの大規模集落のほか銅鐸集中出土地域として発展しており、弥生時代中期から後期への展開過程の解明が今後の課題となるであろう。井通遺跡の成果が今後の研究に活用されることを期待したい。

註

1 三河では管見により詳細な状況は知り得ないが、遠江と接する東三河の橋良遺跡では置石炉が確認されている。

2 古墳時代前期においては、これまでのところ大平遺跡SB14において確認されるのみである。この建物は大平遺跡で最大規模の竪穴建物であり、置石炉となる2基の炉は極めて顕著に熱を受けて検出されている。